

ピカッゴロゴロときたら

落雷による痛ましい死亡事故が今年も起きています。電化製品などの被害も相次いでいます。雷雨の多いこの時期、被害を防ぐための注意点を探りました。

愛知県某私立高校のグラウンドで8月6日、試合中の野球部員(17)が落雷を受け、多臓器不全で亡くなった。

試合開始は昼過ぎ。雨が強く降って一時中断したが、約5分後に晴れ間が見えたため再開した。その後、ピッチャーとして周囲より40メートルほど高いマウンドにのぼっていた部員に雷が直撃したという。

「雷は高い場所に落ちるのが原則」と石井勝・東大名誉教授(高電圧工学)は話す。グラウンドのような平らで広々とした場所では、立っている人に雷が落ちやすい。2012年5月には群馬県の尾瀬国立公園で、温泉を歩いていた男性(59)が命を落とした。

落雷を避けるにはどうすればいいのか。石井さんは「雷の音が聞こえたら、頑丈な建物の中に避難するのが望ましい」と言う。車や電車の中も安全だ。金属で囲われた車体に雷が落ちても、中にいる人には放電しにくい。頭上に電線がある道路も、電線が避雷針の役割をするので比較的安全だという。逃げ込む場所がなければ、ひとまず身を低く保つ。

いったん雷がやんでも注意が必要。近くに別の雷雲が来

車・電車…頑丈な建物へ■やんでも待機

ている可能性もあるからだ。「できれば雷がやんだ後、20分から30分程度は安全な場所

雷雨の時の行動、危険なのはどれ?

- 1 頑丈な建物に入る
- 2 高い木の陰に避難する
- 3 車の中にとどまる
- 4 電線の下に立つ
- 5 キャンプ中にテントで待機
- 6 海や屋外プールで泳ぐ



答え 2 3 6

に待機してほしい」と石井さんは言う。

警察白書によると、05年から5年間で落雷による死者は計14人を数えた。気象庁は人的・物的被害を月別にまとめている。それによると、被

害は8月が最も多く、7、9月と続く。夏から秋にかけては要注意だ。

行楽中にも危険は潜む。12年8月には北アルプスの槍ヶ岳で登山中の男性が死亡した。海水浴場でも雷が人を直撃したり、海に雷が落ちて周りの人が感電したりする事故が起きている。

樹木の下は危険だ。木に雷が落ちると、そばにいる人に放電する可能性がある。キャンプで使うテントの中も同様だ。雷の発生状況は、気象庁や各電力会社のホームページで確認できる。

家の電化製品・電気設備被害も

大きな電流 基板を破損



落雷で大きな電流が流れ込んだ住宅。コンセント周辺が黒くすすけている。—光産業提供

ケースも、電流によって電化製品の基板などが壊れる。

固定電話やパソコンのほか、最近では風呂の給湯システムや太陽光発電システムも被害を受けているという。

日本雷保護システム工業会が、ある損害保険会社のデータを分析したところ、一般住宅への落雷被害を理由に保険金を支払う割合は上昇傾向にあった。05年の支払件数は4800件で、契約件数は(213万6千件)に対する割合は0.22%だったが、08年には0.64%と増えていた。

有識者や企業でつくる「雷害リスク低減コンソーシアム」の花鳥誠人・前事務局長は、「家庭内のネットワーク化が進み、雷サージの通り道となる配線が増えた。また、最近の電子機器は小さな電力

で動くように作られているため、この電流に耐えられないことがある」と説明する。

一番の対策は、雷が来たから、コンセントのプラグや電話回線など外部とつながる線を抜いてしまうこと。保護機能付きの延長コードなども市販されている。

—坂井浩和



7月27日午後、東京都内では雷を伴う強い雨が降った。東京・築地から、瀬戸口翼撮影